

まことの知恵

列王記上 3 : 7~13

Ⅱ コリント 1:12

使徒パウロはコリントの教会に宛てられた手紙の中でこのように言っています。「ユダヤ人はしるしを求め、ギリシア人は知恵を探しますが、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えています。」(Ⅰコリント 1:22)と言っています。なぜならば、キリストこそ、神の力、神の知恵であるからです。知恵ある者の知恵を滅ぼし、賢い者の賢さを意味ないものにするからです。

ですから、パウロの誇りは、人間の知恵によるのではなく、神から受けた純真と誠実によって、神の恵みの中で行動してきたということです。つまり、神様の知恵によって生きることを誇りにしているのです。ユダヤ信仰への熱心さでキリスト者を迫害していたパウロは、ダマスコ途上で主イエスに出会い、献身的な伝道者になりました。彼は当時最も尊敬されていたファリサイ派の律法学者ガマリエルの弟子でもあり、当時の知識人が使うギリシア語を話し、いろいろな学問に精通していたようです。パウロがアグリッパ王とローマの総督フェストゥスの前で福音を宣べ伝えると、フェストゥスは「パウロ、お前は頭がおかしい。学問のしすぎで、おかしくなったのだ」(使徒言行録 26:24)と言いました。パウロが言う福音の内容は理解できないが、パウロが多く学問を身に着けていることを認めているのです。この世の知恵を学んだパウロですが、そのすべてが愚かで、主イエス・キリストの十字架こそ、真の知恵であることを言っています。主の恵みによって生きることこそ、まことの知恵であることを強調しているのです。

では、旧約聖書において示されている知恵とはどのようなものでしょうか。知恵の人といえば、ソロモン王を思い浮かべます。その知恵とは何であるかを考えてみたいのです。

ダビデ王に続いて王になったソロモンはまず神様にいけにえを献げました。一千頭の焼き尽くす献げ物をしました。神様への切実な祈りのようなものであったともいえます。そして、反乱を企む人たちや反対勢力を鎮め、イスラエルの民の前で自分が王として神様に認められていることを公に示しました。祭儀を終え、ほっとする気持ちで深い眠りに入っていたかもしれません。そのようなソロモンの夢枕に現れた神様は言われます。「何事でも願うがよい。あなたに与えよう」。もし、神様が私たちの夢にも現れてこのようにおっしゃるならば、私たちはどのように答えるのでしょうか。

ソロモンの答えは、まず、自分の願いを求める前に、父ダビデに与えられた豊かな恵みと慈しみを讃美しています。神さまを褒め称えているのです。そして、自分の足りなさを謙虚に告白しています。王という権力をもっていたがソロモンは謙遜な人でした。神さまは高慢な者を退けます。ソロモンは王として立たされている自分の任務の重さを深く認識していたのです。また、ソロモンの願いは簡潔明瞭なものでした。9節に書いているように、民を正しく裁き、善と悪を判断することができるように、聞き分ける心をください、ということでした。あれこれ言っていないのです。

ここにクリスチャンの祈禱のモデルを見ることができるのです。讃美と感謝をささげ、そして、神の国と神の義を求める祈り、そして、長くて複雑な祈りではなく、簡潔な祈りなのです。ソロモンは神様に聞き分ける心を求めました。「聞き分ける心」は聞いて理解する、判断することです。そのためにはまず聞くことが大事です。神様のみ声を聞くことです。聖書を通して、また、生活の中で、いろいろな形で神様はわたしたちに語ってくださいます。心を静ませ、神様の御声を聞く、人と話すときも、その人の心を聞く、人の痛みやうめきを聞くこと、それが大事なのです。耳を傾けて真心を聞くことは、神様に対しても人間に対しても賢明なことで、知恵の始まりなのです。しかし、聞くことで終わるのではない、聞き分ける心とは、聞いて理解し、判断し、そして行うことです。

古代の時代から人間は知恵を求めてきました。人々は、知恵というのは、長い体験や経験によって得

られるもの、あるいは知識の蓄積によって与えられるものであると考えていました。それで、学識や知識をたくさんもっている人を賢者とし、尊敬してきましたし、熟練した機能を持っている人も知恵ある者としてみなされてきました。そして、国を支配する統治者たちは神的な知恵や権威を持っている者として、知恵ある者と認められていました。しかし、聖書には、まことの知恵というのは、神様から与えられるものであることを教えています。歴代誌上 22 章 12 節をみると、ダビデはソロモンに王を譲りながら「賢明に判断し識別する力をあなたに与え、イスラエルの統治を託してくださり、あなたの神、主の律法を守らせてくださるように」と願っています。統治者としての知恵、賢明に判断し識別する力は、自分の知識や経験から来るものではなく、神様から与えられるものであることを知っているのです。

預言者エレミヤは、神様に背いていながら知恵があるという人たちに対してこのように言っています。「賢者は恥を受け、打ちのめされ、捕えられる。見よ、主の言葉を侮っていながらどんな知恵をもっているというのか。(エレミヤ 8 : 9)」

ソロモンはそれを知っていたのです。まことの知恵は神様から与えられるものだ。何が主の御心であるかを分別し、従うことであることを知っていたのです。それで、主の知恵を求めようと思っていたのです。神様はソロモンのそのような願いをお喜びになったと聖書には書かれています。神様が喜ばれる願いをソロモンはしたのです。ソロモンは自分のために長寿でもなく、富でもなく、また敵の命も求めることなく、王として民の訴えを正しく聞き分ける知恵を求め、神様に喜ばれました。民の訴え、心を聞く、そしてそこから神様のみ旨を聞き従う、そのような「聞き分ける心」を求めたのです。その故、知恵に満ちた賢明な心が与えられ、求めなかった富も栄光も与えられました。生涯にわたってソロモンと肩を並べうる王は一人もいないほどでした。そして、父ダビデが歩んだように、神様の掟と戒めを守って、神様が示す道を歩むなら長寿にも恵まれる約束も与えられます。

そのとおり、ソロモンは最も知恵ある王であり、イスラエルの驚くほどの経済的な発展をもたらした王になりました。大きな富を築き、神殿を含んだエルサレム宮殿を初め、多くの建物を建設しました。政治的な安定と経済的な繁栄は文化活動を発展させました。箴言、伝道の書(コヘレトの言葉)、また、詩篇の中には彼が書いたものが多く含まれています。コヘレトの言葉の中で、ソロモンは「すべてに耳を傾けて得た結論、神を畏れ、そのいましめをまもれ。これこそ、人間のすべて」と告白しています。ソロモンが神様に求めたもの、それで、神様から与えられる知恵、それは「聞き分ける心」でした。ここでの聞くというのは、ただ聞くではありません。耳を傾けて聞く、聴こうとする意志が入っています。神様の御言葉に、その御旨に「耳を傾けること」が知恵ですが、そこには聞くだけのことではなく、それは「全く聞き従う私なき心」とも訳されるのです。聞くだけではない、それに従う、という行動がそこには伴っています。私なき、つまり、私の考え、私の主張ではない、全く、私を無にして、神様の御声だけに聞き従うということなのです。

ソロモンは父ダビデが人間的な弱さや失敗があるのにもかかわらず、神様に愛され、イスラエルの王として歩むことが出来たのは、神様の慈しみと知恵によるものであることを知っていました。

王としての使命を果たすためには、自分の知識や経験ではなく、神のみ声に従うところにあることを悟ったのです。王として民の訴えを正しく聞き分ける知恵は神様のみ旨を聞く心なのです。民の訴えを聞く、そして神様に聞き従う心がソロモンが神様に求め、また与えられた知恵だったのです。

十字架を見上げて私たちは、独り子イエスをわたしたちに与え、私たちのために死なせるほど、私たちを愛してくださった神様の愛を聞くことが出来ます。イエス・キリストの十字架を通して示された神の恵みによって生きることこそ、まことの知恵であることをパウロは知ったのです。

ソロモン王も、使徒パウロも、まことの知恵は神様からのもので、人の心を聞く、そして神様のみ旨に聞き従うことこそまことの知恵であることを知っていました。それこそ聞き分ける心です。

そのような知恵が私たちにも与えられることを願います。